



# N響との共演で魅せる相性のよさ ロシアの俊英が4シーズン連続で登場

ロシアとフランスの深い関わりを想起させる  
ソビエフならではのプログラム

トゥガン・ソビエフがNHK交響楽団に初めて客演したのは、2008年のことだった。

この初共演のときから、N響とは格別の相性のよさが感じられ、きっと両者の関係は深まっていくのだろうと思えた。近年は、今回を含めて4シーズン連続で客演しているのだから、筆者の予感正しかったのだろう。

ロシアで学んだ指揮者には、大編成のオーケストラを華麗かつ豪快に、色彩的に響かせる才能に長けている者が少なくない。リムスキー・コルサコフなどロシアの作曲家たちは、19世紀終わりから20世紀初めにかけて、オーケストラのパレットを増やし、めくるめくような響きをもたらしてくれたが、それから100年ほど経った現代では、ロシアの指揮者たちが世界各地のオーケストラで大活躍して、先人たちのスコアを美しい音にしてくれている。そのひとりであるソビエフも、N響への客演が、毎回とても楽しみな指揮者である。

今回の曲目には、お得意のロシア音楽に加えて、フランスの作品がある。ソビエフは、フランスのトゥールーズ・キャピトル劇場管弦楽団の音楽監督として10年以上も活躍しているから、フランス音楽を得意とするのは当然ともいえる。しかしそれだけでなく、音楽におけるロシアとフランスの長い関わりを、思い出させてくれるような選曲になっているのだ。

今月のマエストロ

## トゥガン・ソビエフ

Tugan Sokhiev

文◎山崎浩太郎 | Kotaro Yamazaki

ロシア人は、パリを中心とするフランス文化に強い憧<sup>あこが</sup>れを抱いて、その導入につとめてきた。世界に誇るロシア・バレエの伝統が、フランスでのバレエの流行を取り入れて始まったことに、それは象徴されている。チャイコフスキーの三大バレエは、フランスの優美なバレエ音楽の影響によって生まれたもののだ。

オーケストラ作品の分野でも、フランスの華麗な管弦楽法がロシアに伝わって、その豊かなロマン性とともに取り入れられ、19世紀後半に花開くことになった。Aプログラムのベルリオーズ《交響曲「イタリアのハロルド」》と、Bプログラムでのリムスキー・コルサコフ《交響組曲「シェエラザード」》の、それぞれの色彩的なオーケストレーションには、その歴史的な関係が端的に示されている。

### 異国への「片思いの音楽」を どのように聴かせてくれるだろうか

異国への憧れというのは、往々にして一方的な、片思いだったりする。

ドイツ人はアルプスの向こうのイタリアの太陽に憧れるが、けっして陽気にはなれない。イタリア人音楽家はロシア音楽の濃厚なメロディに惹かれるが、ロシア人のようにメランコリックな気質ではない。ロシア人はフランスの文化に憧れるが、あそこまで優美になることはできない。フランス人はロシア音楽の野性的色彩に興奮しながら、そこまで力強くなれない(もちろん例外はある)。

しかしこうした片思いやすれ違いが、こと芸術の分野では美しい、不滅の花を咲かせることがある。今回の2つのプログラムでは、前半と後半で国が変わったり、響きの雰囲気が変わったりする。似ているところと違うところ、そのすれ違いの落差が、それぞれの魅力をさらに際立たせるだろう。ソヒエフは「音楽の片思い」を、どのように聴かせてくれるだろうか。

[やまざき こうたろう／音楽評論家]

### プロフィール

1977年に北オセチア的首都ウラジカフカスに生まれる。サンクトペテルブルク音楽院で、名教師として知られたイリヤ・ムーシンの最後の教え子のひとりとなり、その没後はユーリ・テミルカーノフに指揮を学ぶ。

2005年からフランスのトゥールーズ・キャピトル劇場管弦楽団の首席客演指揮者となり、3年後に音楽監督に就任して、現在もその地位にある。2012年から2016年まではベルリン・ドイツ交響楽団の音楽監督も務めた。2014年からモスクワのポリショイ劇場の音楽監督兼首席指揮者も務めている。

そのほかベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団、シカゴ交響楽団、ボストン交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団など、世界の一流オーケストラにも継続的に客演して好評を得ており、外口ポリタン歌劇場やマリンスキー劇場、エクサン・プロヴァンス音楽祭などでオペラの指揮を手がけている。

NHK交響楽団とは2008年10月に初共演。以後2013年11月、2016年1月と10月、2017年11月と客演を重ねている。[山崎浩太郎]



N響ホームページでは、トゥガン・ソヒエフが1月A・Bプロの魅力を語るインタビュー動画をご覧いただけます



## フランスの王道を体現するマエストロによる 華麗なる響きに酔う

豊かな色彩をもつプログラムで発揮される  
端正かつ緻密なアンサンブル

2015年6月定期公演でN響初登場となったフランスのステファヌ・ドゥネーヴ。1971年生まれの彼を含めて、このところ40代の指揮者の活躍がめざましい。音楽へのアプローチやレパートリーにおいてそれぞれ個性的だが、そんな中で、ドゥネーヴはよい意味で私たちが抱く「フランス音楽の指揮者」というイメージを体現している。管楽器の明度の高い音色を駆使した、華やかな響きが特徴のフランス近代以後のレパートリーは、ドゥネーヴの手腕がよりいかにされるプログラムだ。2015年の定期公演では、ラヴェルの名作《ボレロ》での小気味よい音楽運び、さらにはルーセル《交響曲第3番》のモダンなスタイルなどが、とりわけ印象深いものであった。

ドビュッシー、ラヴェル、プーランク、ルーセル……。ドゥネーヴはすでにこういった近代フランス音楽のレパートリーを手中に収め、録音も多いが、彼の<sup>ちみつ</sup>特徴は豊かな色彩美を追求しつつ、端正で緻密な音楽をつくりあげるところにある。今回まず彼が披露するのは、ルーセルの《バレエ組曲「バカスとアリアーヌ」第2番》。<sup>せい</sup>精緻なリズムと複調によるシャープな響きの表現はドゥネーヴがもともと得意とするところだ。さらにバルリオーズ《序曲「ローマの謝肉祭」》、レスピーギ《ローマの松》というローマにちなんだオーケストラの名作が選曲されており、アン

今月のマエストロ

# ステファヌ・ドゥネーヴ

Stéphane Denève

文◎伊藤制子 | Seiko Ito

サンプルを丹念に磨いていくドゥネーヴがどんな風に作品を仕上げていくのか楽しみである。2015年にはヴァイオリンのルノー・カプソンと共演したが、今回はその弟のチェロ奏者ゲーティエ・カプソンを迎え、サン・サーンズの《チェロ協奏曲第1番》を取り上げる。この作曲家らしい甘く優美な旋律美が際立つ名曲で、ソロとオーケストラとの巧みな対話を展開してくれることだろう。

### 名シェフがつくりだす 極上の「フランス料理」を味わう

若くして小澤征爾のアシスタントをつとめ、2013年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本（現セイジ・オザワ松本フェスティバル）においてラヴェル《スペインの時》、同年スペインのリセウ大劇場でオフエンバック《ホフマン物語》を指揮しているドゥネーヴは、声楽との共演でも実力を発揮してきた。N響とともにフランス・オペラの演奏会形式に挑んでくれたら……とついつい夢想してしまう。またフランスの現代作曲家ギヨーム・コネソン作品集の録音が高く評価されているドゥネーヴには、アンリ・デュティユーやトリスタン・ミュライユといった精緻なオーケストラの響きを楽しめるようなレパートリーを、今後N響で手掛けてほしいと思う。ともあれ今回の公演はドゥネーヴの良さをたっぷり味わうにはうってつけのプログラムだ。名シェフが極上の食材でつくる美味なるフランス料理。ベテラ

ンと若手がうまく融合し、新たな時代の響きを熟成させつつあるN響で、2日かぎりのとびきりのコースを味わうことができるにちがいない。

[いとう せいこ／音楽評論家]

#### プロフィール

1971年フランス北部の町トゥールコワン生まれ。1995年パリ国立高等音楽院卒業後、ゲオルク・ショルティ、ジョルジュ・プレートル、小澤征爾らのアシスタントとして研鑽を積んだ。ロイヤル・スコットランド・ナショナル管弦楽団音楽監督、シュトゥットガルト放送交響楽団首席指揮者を歴任。現在、フィラデルフィア管弦楽団で首席客演指揮者をつとめる。2015年ブリュッセル・フィルハーモニックの音楽監督に就任し、先頃同フィルと2022年までの契約延長が決定した。2019/20年シーズンからセントルイス交響楽団音楽監督に就任予定。小澤のアシスタントとして1998年松本のサイトウ・キネン・フェスティバル（現セイジ・オザワ松本フェスティバル）に参加するなど、日本の楽界とは以前から縁があり、指揮者としての初登場は2003年の新日本フィルハーモニー交響楽団の公演。

N響とは2015年初共演し、得意のラヴェル、ラロ、ルーセルというフランス音楽プログラムを披露した。録音にドビュッシー、ルーセル、ラヴェル、フランクなどの作品集があり、フランスの現代作曲家ギヨーム・コネソンの作品集により、仏雑誌『ディアパゾン』の金賞受賞。  
[伊藤制子]

## PROGRAM

A

第1905回

NHKホール

1/26 土 6:00pm

1/27 日 3:00pm

指揮 | トウガン・ソヒエフ | 指揮者プロフィールはp.4

ハープ | グザヴィエ・ドゥ・メストレ

ヴィオラ | 佐々木 亮\*

コンサートマスター | 篠崎史紀

## リヤードフ

交響詩「バーバ・ヤガー」作品56[3']

## グリエール

ハープ協奏曲 変ホ長調 作品74[27']

I アレグロ・モデラート

II 主題と変奏: アンダンテ

III アレグロ・ジョコーソ

—— 休憩 ——

## ベルリオーズ

交響曲「イタリアのハロルド」作品16\*  
[43']

I 山の中のハロルド。憂うつと幸福と歓喜の情景

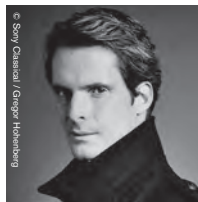
II 夜の祈りを歌う巡礼の行進

III アブルッチの山人が愛人に寄せるセレナード

IV 山賊の酒盛り。前の情景の思い出

## Artist Profiles

## グザヴィエ・ドゥ・メストレ (ハープ)



© Sony Classical / George Henning

1973年、フランスのトゥーロンに生まれる。9歳のとき、トゥーロンの音楽院でハープを学び始める。パリでジャクリヌ・ボローとカテリーヌ・ミシェールに師事。16歳のときにパリ・ハープ・コンクールで優勝。1996年、バイエルン放送交響楽団に入団。1998年、USA国際ハープ・コンクールで優勝。1999年にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のソロ・ハープ奏者に就任。2002年、アンドレ・プレヴィン指揮ウィーン・フィルとヒナステラ

《ハープ協奏曲》を共演。現在は、ソリストとして活躍している。これまでにバイエルン放送交響楽団、ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団などと共演。ディアナ・ダムラウ、モイツァ・エルトマンらの歌手たちとのデュオ・コンサートも行う。CDでは、ロドリゴ《アランフェス協奏曲》、ハイドンのピアノ協奏曲、モーツァルト《ピアノ協奏曲第19番》など、他の楽器のための協奏曲をハープで演奏。2001



年以来、ハンブルク音楽大学で後進の指導にもあたる。

NHK交響楽団とは、2005年7月のN響「夏」でボエルデュール《ハーブ協奏曲》を、2014年4月のオーチャード定期でモーツァルト《ピアノ協奏曲第19番》（ハーブ版）を共演している。

## 佐々木 亮（ヴィオラ）



埼玉県出身。東京藝術大学附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学卒業。1991年、日本現代音楽協会室内楽コンクール第1位獲得、「朝日現代音楽賞」受賞。1992年、東京国際音楽コンクール室内楽部門で第2位に入賞。ジュリアード音楽院に留学し、ヴァイオリンからヴィオラに転向。アスペン音楽祭、マールボロ音楽祭に参加。これまでに、掛谷洋三、澤和樹、田中千香士、ドロシー・ディレイ、川崎雅夫に師事。兎東俊之、フェリックス・ガリミール、ジェーコブ・ラタイナーに室内楽を学ぶ。室内楽に熱心に取り組み、岡山潔弦楽四重奏団、東京クライス・アンサンブルなどに参加。桐朋学園大学、洗足学園音楽大学で後進の指導にもあたっている。

NHK交響楽団に、2004年入団。2008年から首席奏者を務めている。2015年10月の定期公演では、パーヴォ・ヤルヴィの指揮のもと、R.シュトラウスの《交響詩「ドン・キホーテ」》で、サンチョ・パンサ役であるヴィオラ独奏を務めた。ベルリオズの《交響曲「イタリアのハロルド」》の独奏は、協奏曲的なスケールの大きさが求められるだけに、佐々木のソリストとしての実力が示されるであろう。

〔山田治生／音楽評論家〕

### Program Notes | 成田麗奈

フランスの作曲家エクトル・ベルリオズ（1803～1869）によるヴィオラ独奏つきの《交響曲「イタリアのハロルド」》のメイン・プログラムと、ロシアの作曲家による2作品が好対照をなす。アナトーリ・リャードフ（1855～1914）による色彩豊かな《バーバ・ヤガー》と、ベルリオズが巧みに描き出すイタリアの情景、いずれも音楽でしか描くことのできない別世界を堪能したい。レインゴリト・グリエール（1875～1956）の《ハーブ協奏曲》で、終始華麗に技巧を繰り広げるハーブ独奏者に比して、孤独で沈黙しがちな「ハロルド」という難役を演じるヴィオラ独奏者、それぞれの活躍も期待される。

### リャードフ

## 交響詩「バーバ・ヤガー」作品56

19世紀後半のロシアにおいては、交響詩をはじめ、音画や音詩といったジャンル名を冠する作品が数多く生み出されており、ロシアの民謡や民族音楽、民話やおとぎ話を

音楽に取り込むことが重視されていた。その中でもリャードフは「音の細密画家」として誉れ高い作曲家だ。自身の創作に対して厳しい審美眼を持っていた彼は、主としてピアノ作品において「音の細密画」を探究してきたが、1900年以降、より多彩な響きを求めて管弦楽作品に可能性を見出す。代表作《バーバ・ヤガー》《魔の湖》《キキモラ》では、いずれもロシアの民話やおとぎ話を題材に幻想的な情景を描いている。

「バーバ・ヤガー」とは、ロシアの民話に登場する魔女で、鶏の足の上に建つ小屋に住み、子供をさらって食べてしまうという伝説が有名である。音楽作品の題材としてもしばしば取り上げられ、リャードフのほかにもダルゴムイシスキーにも同名の作品があり、ムソルグスキー《展覧会の絵》にも登場する。リャードフは、アフアナシエフの『ロシア民話集』に触発されて本作品を作曲した。バーバ・ヤガーが口笛を吹いて杵と箒、白を呼び出し、これらを使って飛翔する様子や、にぎやかな音をたてて森がざわめく様子が生き生きと描かれている。

作曲年代	1891～1904年
初演	1904年3月18日、サンクトペテルブルク、フェリクス・ブルメンフェルトの指揮
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓、シロフォン、弦楽

## グリエール

### ハープ協奏曲 変ホ長調 作品74

この作品は、ロシアの卓越したハープ奏者クセーニヤ・エルデーリ(1878～1971)の依頼に応じて1938年に作曲された。この時期の西洋芸術音楽においては、一方で十二音技法をはじめとする前衛音楽が探究され、他方ではバロック時代以前の様式に基づく古典主義的な音楽が志向されたが、いずれも「19世紀的なもの」からの脱却を模索しての動きであった。だが、ロシア(当時はソヴィエト)国内に留まり創作と教育に身を捧げたグリエールは、西洋芸術音楽の潮流の渦中に身を置くことよりも、19世紀ロシア音楽の伝統を継承し、民族的な要素を取り入れた作風を維持した。《ハープ協奏曲》においてもその傾向が見られ、各楽章に取り入れられた民謡風の旋律や民族舞踊のリズムが、手堅い管弦楽法によって縁どられている。

**第1楽章** アレグロ・モデラート、変ホ長調、4/4拍子、ソナタ形式。冒頭から、ハープ独奏がグリッサンドを駆使した輝かしい第1主題を提示する。クラリネットによって提示される第2主題は、ハープ独奏に受け渡され鮮やかに変化する。展開部の中盤に挿入されるカデンツァでは、幅広い音域と技巧が駆使され、骨太な音色から繊細な音色まで、ハープの多彩な音色が惜しげもなく披露される。

**第2楽章** アンダンテ、変イ短調、6/8拍子、主題と変奏(コーダつき)。低弦による前奏に誘われ、ハープ独奏が哀愁たどる主題を提示する。この主題は6回変奏されるが、主題はハープのみならず、さまざまな楽器の組み合わせによって奏される。ハープ独奏は叙情たっぷりに旋律を歌い上げる部分や、細やかに技巧を駆使する部分など変化に富み、レース細工のように精緻な響きが際立つ。

**第3楽章** アレグロ・ジョコソ、変ホ長調、2/4拍子、ソナタ形式。ヴァイオリンとヴィオラが第1主題の冒頭を予示したのち、ハープ独奏が勇壮な第1主題を提示する。第2主題もまたハープ独奏によって導かれ、オーケストラとともに盛り上がりを見せる。展開部はオーケストラが主導し、ハープは控えめな伴奏で彩る。再現部ではハープが第1主題を、オーケストラが第2主題を中心に奏でながら両主題を変形させてクライマックスを生み出す。

作曲年代	1938年
初演	1938年11月23日、モスクワ音楽院大ホール、レオニード・シュテインベルクの指揮、クセーニヤ・エルデーリのハープ独奏、モスクワ・フィルハーモニー管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、ティンパニ1、トライアングル、弦楽、ハープ・ソロ

## ベルリオーズ

### 交響曲「イタリアのハロルド」作品16

ベルリオーズは作曲家であり指揮者であると同時に、批評家、文筆家でもあった。彼の『回想録』には多彩な文章がしたためられており、《イタリアのハロルド》成立の過程についても詳細に綴られている。いわく、《幻想交響曲》を聴いて感銘を受けたパガニーニにより、彼のヴィオラの名器を生かすべく、ヴィオラ独奏のための新作が依頼された。だが、書き上げた第1楽章の楽譜を見て、ヴィオラ独奏の演奏場面の少なさにパガニーニが失望したため、ヴィオラ協奏曲ではなく、自由な構想によるヴィオラ独奏つき交響曲として完成させたというのだ。作曲家の自伝や回想録を鵜呑みにすべきでないことはベルリオーズに限ったことではないが、この回想に関しては、ベルリオーズ自身の願望によって脚色された逸話だとみなされている。

作曲にあたり、バイロンの長編詩『チャイルド・ハロルドの巡礼』に着想を得て、ベルリオーズ自身がローマ大賞受賞者としてイタリアに滞在していたときの印象をもとに「情景の連続」を構成した。そこには、ハロルドに自らを重ねた私小説的な性質がみられる。ただし、これはベルリオーズの自我の強さのみに起因するものではなく、彼の愛読していたゲーテやフランス文学の諸作品を原型にしたとみるべきだろう。ヴィオラ独奏はハロルド役を演じるが、本作品においてハロルドはあくまでも傍観者であり疎外された存在である。こうしたハロルドの抱える憂鬱と孤独は、ヴィオラの音色、この楽器が奏でる主題の



扱われ方、ヴィオラ独奏とオーケストラの関係性などによって、実に効果的に表現されている。

**第1楽章〈山の中のハロルド。憂うつと幸福と歓喜の情景〉** イデー・フィクス(固定楽想)であるハロルドの主題が提示される長い序奏と、ソナタ形式の主部からなる。序奏は低弦の半音階的な動きで始まり、木管楽器によってハロルドの主題が短調で先取りされたのち、長調に転じ、ハープの伴奏を携えたヴィオラ独奏がハロルドの主題を提示する。歓喜に満ちた主部に登場する2つの主題は、いずれもヴィオラによって導かれる。

**第2楽章〈夜の祈りを歌う巡礼の行進〉** 緩徐楽章に相当する。オーケストラが演じる巡礼者の一行が、巡礼歌を繰り返しながら近づいてくる。途中からハロルドの主題がこれに交わる。中間部の「宗教的な歌」では、ヴィオラ独奏が弱音のアルペジオで呼応する。再び巡礼歌を歌いながら去っていく巡礼者たちを傍目に、ヴィオラ独奏は遠慮がちにアルペジオを奏でる。

**第3楽章〈アブルツォの山人が愛人に寄せるセレナード〉** スケルツォ楽章に相当する。主部で奏でられるのは降誕祭の折にアブルツォの山中からローマを訪れる山人の吹く軽快な音楽である。中間部では、弦楽器の伴奏に乗って、恋心を歌うセレナードの調べをイングリッシュ・ホルンをはじめ管楽器が担い、途中ヴィオラ独奏がハロルドの主題を奏でて交わる。主部が再現し、山人たちが去ったあと、ヴィオラ独奏はセレナードの調べをひっそりと歌う。

**第4楽章〈山賊の酒盛り。前の情景の思い出〉** 山賊の鮮烈な音楽が主題として提示され、ベートーヴェンの《第9》を想起させる手法で、ヴィオラ独奏によって先行する3楽章の主題の回想が挿入される。続いて挿入されるハロルドの主題は、次第に狂乱し勢いを増す山賊の音楽に圧倒され、大音量の中に飲み込まれる。

作曲年代	1834年
初演	1834年11月23日、パリ、ナルシス・ジラル指揮、クレティアン・ユランのヴィオラ独奏
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、タンブリン、トライアングル、ハープ1、弦楽、ヴィオラ・ソロ

PROGRAM

B

第1904回

サントリーホール

1/16 水 7:00pm

1/17 木 7:00pm

指揮 トゥガン・ソヒエフ 指揮者プロフィールはp.4

コンサートマスター 篠崎史紀

フォーレ

組曲「ペレアスとメリザンド」作品80

[19']

- I 前奏曲
- II 糸を紡ぐ女
- III シチリア舞曲
- IV メリザンドの死

ブリテン

シンプル・シンフォニー 作品4[18']

- I 騒々しいブルー
- II たのしいピチカート

III 感傷的なサラバンド

IV 浮かれたフィナーレ

——休憩——

リムスキー・コルサコフ

交響組曲「シェエラザード」作品35[46']

- I 海とシンドバッドの船
- II カレンダー王子の物語
- III 若い王子と王女
- IV バグダッドの祭り—海—船は青銅の騎士のある  
岩で難破—終曲

Program Notes | 柴辻純子

トゥガン・ソヒエフが近現代のレパートリーを指揮すると、オーケストラは響きを鮮明にして輝き出す。ガブリエル・フォーレ(1845~1924)の《ペレアスとメリザンド》は繊細に、リムスキー・コルサコフ(1844~1908)の《シェエラザード》では極彩色の音絵巻が広がる。ベンジャミン・ブリテン(1913~1976)の《シンプル・シンフォニー》は若さと素直さ。喜怒哀楽のドラマがそこにある。

フォーレ

組曲「ペレアスとメリザンド」作品80

ベルギーの詩人・劇作家のモーリス・メーテルリンク(1862~1949)が1892年に発表した戯曲『ペレアスとメリザンド』(全5幕)は、宿命的な恋を描いた作品である。中世の

架空の国アルモンドの王子ゴローは、泉のほとりで泣いていた若い女性メリザンドと出会い、妻にした。しかし彼女はゴローの若い異父弟ペレアスと親密になり、嫉妬に狂ったゴローは、ペレアスを剣で殺し、その場から逃げたメリザンドもやがて静かに息を引き取る。森の奥深くにひっそりとたたずむ古い城。登場人物の感情が、神秘的な森、嵐の海、庭園の美しい泉、かぐわしい薔薇の香りなどを背景に絡み合う。

フォーレの《ペレアスとメリザンド》は、1898年に英訳された戯曲がロンドンで上演された際、劇付随音楽として作曲された。その後、組曲が編まれ、管弦楽用書き直された。

**第1曲〈前奏曲〉** クワジ・アダージョ、ホ短調、3/4拍子。第1幕への前奏曲。メリザンドを思わせる穏やかな表情の音楽が静かに広がり、後半のホルン独奏による同音反復（ホルン信号）は、狩りに訪れたゴローの角笛を暗示する。

**第2曲〈糸を紡ぐ女〉** アンダンティーノ・クアジ・アレグレット、ト長調、3/4拍子。第3幕でメリザンドが城の奥の一室で糸を紡いでいる。紡ぎ車を表す第1ヴァイオリンの3連符の動きにのせて、オーボエが主題を歌う。

**第3曲〈シチリア舞曲〉** アレグレット・モルト・モデラート、ト短調、6/8拍子。第2幕でペレアスとメリザンドが庭園の泉の前で戯れる場面の音楽。もとは1893年に書かれたチェロとピアノのための小品で、1909年に追加された。

**第4曲〈メリザンドの死〉** モルト・アダージョ、ニ短調、3/4拍子。第5幕への前奏曲。低弦のピチカートを背景に、複付点の重たいリズムの旋律が悲しみを広げる。

作曲年代	1898年
初演	[劇付随音楽] 1898年6月21日、ロンドン、作曲家自身の指揮 [組曲版] 1901年2月3日、パリ・コンセルヴァトール・ラムルー、カミーユ・シュヴィヤール指揮
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ1、ハープ1、弦楽

## ブリテン

### シンプル・シンフォニー 作品4

20世紀イギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテンは、イングランド東部サフォーク州の海辺の町ローストフトに生まれた。母親の影響で音楽に親しみ、独学で作曲もしていたブリテンは、11歳のときノーフォークの音楽祭でフランク・ブリッジ(1879～1941)の《交響組曲「海」》を聴き大いに魅せられた。ブリッジは当時、イギリスでは異端の前衛作曲家とされていたが、ブリテンは、1930年にロンドンの王立音楽大学に入学するまで、彼のもとで和声や対位法など音楽の基礎を学んだ。

《シンプル・シンフォニー》は、音楽大学卒業目前の1934年に、9歳から12歳までに書いたピアノ曲や歌曲などの素材をもとに作曲された。各楽章にユニークなタイトルが付され、音楽からは、その才能の早熟ぶりと青年作曲家の瑞々しい感性が伝わってくる。

**第1楽章〈騒々しいブーレ〉** アレグロ・リトミコ。フランス起源の舞曲ブーレに由来する賑やかな音楽。《ピアノ組曲第1番》(1926)による2拍子のリズムを強調した力強い導入に続いて、チェロから始まる活発な第1主題、1923年作曲の歌曲に基づく第2主題が第1ヴァイオリンに現れる。

**第2楽章〈たのしいピチカート〉** プレスト・ポッシビレ・ピチカート・センプレ。できる限り素早くと指示され、楽章を通じてピチカートで演奏される。弱音の軽快な主題は、《ピアノのためのスケルツォ》(1924)に基づく。中間部のトリオ(モルト・ペザンテ)の低音の規則的なリズムに支えられた民謡風の主題は、1924年作曲の歌曲からの引用で、この主題はコーダにも現れる。

**第3楽章〈感傷的なサラバンド〉** ポコ・レント・エ・ペザンテ。サラバンドは3拍子の古典舞曲。《ピアノ組曲第3番》(1925)による息の長い美しい主題が、ヴァイオリンでしっかりと歌われる。中間部のヴィオラとチェロによる穏やかな主題は、《ピアノのためのワルツ》(1923)から転用された。

**第4楽章〈浮かれたフィナーレ〉** プレスティッシモ・コン・フォーコ。活発な導入に続いて、《ピアノのためのソナタ第9番》(1926)による第1主題が目まぐるしく動き、悩ましげな第2主題は1925年作曲の歌曲に基づく。2つの主題の展開に、高音からかけ下りるピチカートなど華やかな演奏効果が加わり、二長調で結ばれる。

作曲年代	1933～1934年
初演	1934年3月6日、ノーウィッチ・スチュアート・ホール、作曲家自身の指揮
楽器編成	弦楽

## リムスキー・コルサコフ

### 交響組曲「シェエラザード」作品35

ロシアの軍人貴族の家系に生まれたリムスキー・コルサコフは、海軍士官学校時代(1856～1862)にバラキレフ(1837～1910)と知り合い、国民楽派「五人組」の一員となった。バラキレフの指導のもとで《交響曲第1番》(1865)を書き始めるも、未完のままで士官候補生として遠洋航海に出発するなど、その後も海軍軍人として職務を果たしながら創作活動を続けた。やがて作曲に専念するようになり、1871年にサンクトペテルブルク音楽院教授に就任する。専門的な音楽教育は受けていないが、豊かな才能を開花させ、管弦楽法の大家としてロシア内外の作曲家に大きな影響を与えた。その手腕は編曲などにおいても発揮され、かつての「五人組」の仲間の作品を甦らせた。ムソルグスキー(1839～1881)の《交響詩「はげ山の一夜」》のオーケストレーションや《歌劇「ホヴァンシチナ」》の補筆、ボロディン(1833～1887)の未完の《歌劇「イーゴリ公」》も、グラズノフ(1865～1936)とともに完成させた。

こうした作業のなかで、新たな作品のアイデアを得ることもあった。1888年に作曲された《交響組曲「シェエラザード」》は、《イーゴリ公》の補筆作業を手がけるなかで着想された。どちらも東洋風の異国情緒にあふれ、雄大さと力強さが広がる。リムスキー・コルサコフは、『千一夜物語(アラビアン・ナイト)』を題材にし、この物語を「女性に不信の念を抱くシャフリアル王は、毎夜、女性と一夜を共にしては翌朝、殺害してきた。新しい妃になるシェエラザードは、千一夜の間、不思議な物語を聞かせ続け、王に残忍な考えを捨てさせた」と紹介している。そして、初演の際に作曲者が楽団員に説明した内容などから、第1楽章は「海とシンドバッドの船」、第2楽章は「カレンダー王子の物語」、第3楽章は「若い王子と王女」、第4楽章は「バグダッドの祭り—海—船は青銅の騎士のある岩で難破」といったタイトルをもつと考えられている。

特殊楽器を含まない2管編成にもかかわらず、絢爛豪華に鳴り響くオーケストレーションは、リムスキー・コルサコフならではである。第1楽章のシャフリアル王とシェエラザードの主題は、その後も各楽章に現れ、循環主題として楽章を有機的に結び付け、第1楽章と終楽章の海の描写は、海軍時代の経験が生かされているとも言われる。

**第1楽章** ラルゴ・エ・マエストーソ。荒々しい響きのシャフリアル王の主題で始まり、続いて独奏ヴァイオリンがゆるやかに優美なシェエラザードの主題を奏でる。主部(アレグロ・ノン・トロppo)は、波打つような海の様子が描かれ、フルートによるシンドバッドの主題が現れる。海は大きくうねりをあげ、シャフリアル王やシェエラザードの主題も現れる。

**第2楽章** レント。冒頭の独奏ヴァイオリンのシェエラザードの主題が、新たな物語の開始を伝える。カレンダー王子の主題(アンダンティーノ)は、ファゴットで滑稽な表情を見せながら現れ、各楽器に受け継がれる。金管楽器の鋭いファンファーレ(アレグロ・モルト)で緊迫感が増すが、カレンダー王子の主題とともに陽気な音楽が戻ってくる。

**第3楽章** アンダンティーノ・クワジ・アレグレット。若い王子と王女の夢見のようなロマンチックな音楽。弦楽器が官能的な美しい旋律を歌う主部に対して、中間部は、小太鼓のリズムにのせてクラリネットが快活な主題を奏する。作曲者によれば、後半は、独奏ヴァイオリンのための楽章で、シェエラザードの主題も現れ、技巧的にも発展する。

**第4楽章** アレグロ・モルト。第1楽章のシャフリアル王の主題が再現され、シェエラザードの主題が続く。賑やかな祭りとなり、これまでの楽章の主題が回想される。第1楽章の海の情景が戻ってくると、嵐に襲われ船は難破する。最後(レント)は、優しく語りかけるシェエラザードの主題に、シャフリアル王の主題が重なり、全曲を締めくくる。

作曲年代	1888年
初演	1888年11月3日(ロシア旧暦10月22日)、サンクトペテルブルク、作曲者自身の指揮
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、ピッコロ1、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、大太鼓、サスペンデッド・シンバル、タムタム、トライアングル、小太鼓、タンブリン、ハープ1、弦楽



PROGRAM

C

第1903回

NHKホール

1/11 金 7:00pm

1/12 土 3:00pm

指揮 | ステファヌ・ドゥネーヴ | 指揮者プロフィールはp.6

チェロ | ゴーティエ・カプソン

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

ルーセル

バレエ組曲「バックスとアリアーヌ」

第2番[18']

サン・サーンス

チェロ協奏曲 第1番 イ短調 作品33

[20']

I アレグロ・ノン・トロッポ

II アレグレット・コン・モート

III テンポ・プリモ (アレグロ・ノン・トロッポ)

——休憩——

ベルリオーズ

序曲「ローマの謝肉祭」作品9[9']

レスピーギ

交響詩「ローマの松」[21']

I ボルゲーゼ荘の松

II カタコンバ付近の松

III ジャニコロの松

IV アッピア街道の松

## Artist Profile

### ゴーティエ・カプソン(チェロ)



1981年、フランス生まれ。5歳よりチェロを始め、パリ国立高等音楽院に学ぶ。EU ユース管弦楽団とグスタフ・マーラー・ユージェント管弦楽団に参加。1999年、トゥールーズのアンドレ・ナヴァラ・コンクールで優勝。その後、ソリストとして世界各地で活発な演奏活動を展開している。ドゥダメル指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、エッシェンバッハ指揮バリ管弦楽団他、著名オーケストラとの共演も数多い。室内楽にも積極的で、マ

ルタ・アルゲリッチやダニエル・バレンボイム、兄のヴァイオリニスト、ルノー・カプソンらと共演している。

レコーディングも多く、ロマン派から20世紀作品を中心としたレパートリーを録音し、卓越した技巧による流麗な演奏で多くのファンを魅了している。教育分野ではルイ・ヴァイトン財団とともにパリでチェロ・エクセレンス・クラスを開催する。N響とは2013年以来の共演。使用楽器は1701年製のマッテオ・ゴフリラー。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

## Program Notes | 安川智子

アルベール・ルーセル(1869～1937)の《バレエ「バッカスとアリアーヌ」》がパリのオペラ座で初演された1931年5月、国際的な植民地博覧会が、同じパリで開幕した。19世紀から20世紀にかけてのフランスは万国博覧会開催や植民地拡大の時代。異国や未知の世界への憧れは、作曲家たちの想像力を刺激し、管弦楽の色彩の幅を広げていく。本日のプログラムは、彼らが当時夢見た世界の音楽的パノラマだ。

### ルーセル

## バレエ組曲「バッカスとアリアーヌ」第2番

古代ギリシャ神話におけるアリアドネ(アリアーヌ)は、アテネの王子テーセウスと恋に落ちるが、ナクソス島で眠っている間に彼に置き捨てられる。眠りから覚めたアリアドネは、葡萄酒の神ディオニュソス(バッカス)に見初められ、その愛に屈する。島に捨てられたアリアドネの嘆きは、絵や音楽の主題として何度もとりあげられてきた。ルーセルの《バッカスとアリアーヌ》は、この神話をもとにアベル・エルマンが書いた台本に基づく全2幕のバレエである。各幕がそれぞれ《組曲第1番》、《第2番》に相当し、独立した管弦楽曲としても演奏される。《組曲第2番》は、アリアーヌの眠りと目覚めから始まり、嘆きよりもむしろ、バッカスとの愛に焦点が当てられている。ドビュッシー《牧神の午後への前奏曲》(1894)の前例にならない、夢と官能そのものが音で表現される。そこにストラヴィンスキーのバレエがもつ斬新なリズムと、ダリウス・ミヨーの音楽にヒントを得た複調性(2つの異なる調が同時に進行する)が加わり、ルーセル独自の音楽が生まれている。

導入(アリアーヌの眠り)では、弦楽器と管楽器が織りなす複調の響きが、眠りの中の混濁した意識を表現し、ヴィオラとヴァイオリンの独奏によって、幕開けへと導かれる。アリアーヌが目覚め、急いで辺りを見回す様子はクラリネットの細かい動きで表現される。捨てられたことに気づいたアリアーヌは、波に身を投げようとするが、ハーブの下行するグリッサンドを経て、バッカスの腕の中に落ちる。バッカスの踊りでは、どこかひょうきんな音型が行進曲風に拍を刻む。そして接吻。拍の刻みは消えて、楽器の音色が混ざり合い、広がっていく。木管楽器の独奏による掛け合いがディオニュソスの歓喜を表し、女た

ちの行進へと進んでいく。アリアーヌの踊りでは、異国的で妖艶な旋律が、ヴァイオリンから木管へと受け継がれていく。バッカスとアリアーヌの踊りが、10/8拍子という特徴的なリズムで繰り返された後、最後はお決まりの狂宴（バッカナール）となる。

作曲年代	1930年
初演	[パレエ版] 1931年5月22日、フィリップ・ゴーベール指揮、セルジュ・リファール振付、パリ、オペラ座 [組曲第2番] 1934年2月2日、ビエール・モントゥー指揮、パリ交響楽団
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、タムタム、タンブリン、トライアングル、ハープ2、チェレスタ1、弦楽

## サン・サーンズ

### チェロ協奏曲 第1番 イ短調 作品33

長く生きることによって時代の変化の生き証人となったカミーユ・サン・サーンズ(1835～1921)にとって、異国趣味は重要な要素だが、それはあくまで古典的な形式の範囲内で表現された。《チェロ協奏曲第1番》が初演された1873年、サン・サーンズは初めてアルジェリアを旅し、その開放的なエネルギーに強く惹かれる。以後アフリカはサン・サーンズの発想源となり、《ピアノ協奏曲第5番「エジプト風」》(1896)などが生まれた。

協奏曲はサン・サーンズがもっとも得意とするジャンルであった。チェロ協奏曲は2作品ある。《第1番》は、ベルギーの名チェリスト、オーギュスト・トルベック(1830～1919)に献呈され、彼によって初演された。トルベックはヴィオラ・ダ・ガンバをはじめとする古楽器の修復と収集、演奏にも造詣が深く、古楽の再興に熱心であったサン・サーンズとは、志を同じくしていた。本作品は協奏曲に典型的な3楽章形式を装いつつ、実際は3部分からなる一続きの単一楽章である。その形式における革新性はむしろ、古典派以前の作品から同時代のフランツ・リストの交響詩まで、形式を知り尽くしたサン・サーンズだからこそ可能な、形式の自在な応用である。

第1部(アレグロ・ノン・トロppo)では、イ短調の主和音が鳴ったあとすぐに、チェロ独奏が旋律を奏でる。この旋律が、曲全体を統括する主要主題となる。下行する主要主題に対して、やはりチェロが奏でる第2主題は、高みに昇っていく旋律である。中間部となる第2部(アレグレット・コン・モート)は変ロ長調のメヌエットである。チェロは素朴な伴奏に乗って、古典派オペラのアリアのように切々と旋律を歌う。変ロ長調のまま、オーボエが主要主題を奏するところから、全体としては再現部でもある第3部が始まる。イ短調に戻り、チェロは第3部の新たな第2主題として、息の長い哀切な旋律を奏でる。最後はイ長調で終わる。全曲を通じて独奏者に主導権と華をもたせる手法は、サン・サーンズの協奏曲に共通した特徴である。

作曲年代	1872年
初演	1873年1月19日、オーギュスト・トルベックのチェロ独奏、エドゥアール・デルドヴェーズ指揮、パリ音楽院管弦楽団、パリ音楽院にて
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、チェロ・ソロ

## ベルリオーズ

### 序曲「ローマの謝肉祭」作品9

エクトル・ベルリオーズ(1803～1869)は、楽器の音色ひとつひとつに劇的な意味をもたせた最初期の作曲家である。《序曲「ローマの謝肉祭」》の土台となった《歌劇「ベンヴェヌート・チェッリーニ」》は、1838年9月10日にパリのオペラ座で初演されたが、明らかな失敗に終わった。しかし16世紀ローマの謝肉祭を背景とするこのオペラから引用した主要主題と楽器法の秀逸さが、《ローマの謝肉祭》の成功を決定づけている。

冒頭を飾るのは、オペラ第1幕の謝肉祭の場面から転用したサルタレッロ(イタリアの民俗舞踊)の音楽である。その後、オペラの愛の二重唱から引用された、イングリッシュ・ホルン独奏による叙情的な歌が続く。序曲の作曲時に出版された『現代楽器法および管弦楽法』の中で、ベルリオーズはイングリッシュ・ホルンの特徴を「メランコリックな、夢見のような声であり、常に気高く、過去の感情やイメージを思い起こさせるような“遠い”響きにふさわしい」と表現している。この旋律が他の木管楽器と弦楽器に受け渡されると、タンブリンをはじめとする打楽器が加わって楽しいマーチを演出し、どこか郷愁を残しつつも祭りへと戻っていく。アレグロ・ヴィヴァーチェ(急速に)の部分に入り、軽快に拍を刻む新しい主題が登場する。この主題と冒頭部サルタレッロの主題、そして上述の歌の旋律が絡み合い、一体となってフィナーレまで駆け抜ける。フランス管弦楽の基盤を築いたベルリオーズの才能が、見事な主題法に表れている。

作曲年代	1843～1844年
初演	1844年2月3日、作曲家自身の指揮、パリ、サル・エルツ
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、ティンパニ1、シンバル、タンブリン、トライアングル、弦楽

## レスピーギ

### 交響詩「ローマの松」

ベルリオーズやドビュッシーなど、アカデミーの作曲コンクール(ローマ賞)に優勝したフランスのエリート作曲家たちが勉学のために派遣されたのが、ローマだった。そこにはもちろん、音楽の歴史と伝統を学ぶという目的があった。一方で、フランスの最先端の音

楽家を迎え続けたローマは、伝統と前衛を融合させたオットリーノ・レスピーギ(1879～1936)のような優れた作曲家を生み出す。

ボローニャ生まれのレスピーギは、「ローマ三部作」と呼ばれる交響詩群、《ローマの噴水》(1916)、《ローマの松》(1924)、《ローマの祭り》(1928)を、1913年にローマへ移り住んだ後に作曲した。《ローマの松》は、ローマの4つの歴史的名所に立つ松を主題とする4部分からなり、一続きに演奏される。何世紀も生き続ける松の木を前に、古代ローマへと想像の羽は広がり、とりわけ第2曲、第4曲では、あたかも眼前に蘇<sup>よみがえ</sup>るかのよう<sup>に</sup>に荘厳あるいは壮大な古代世界が音楽によって表現される。

第1曲〈ボルゲーゼ荘の松〉では、子供たちがヴィラ・ボルゲーゼ(ボルゲーゼ荘)の庭園で遊んでいる様子が、チェレスタ、ハーブ、ピアノを加えた輝かしい響きで表現される。17世紀初頭にボルゲーゼ枢機卿の構想で建造されたこのヴィラには、ヴィラ・メディチが隣接し、19世紀になるとここにフランスのローマ賞受賞者が留学するようになった。子供たちの姿が消えて突然場面が変わり、第2曲〈カタコンベ付近の松〉へと移る。古代ローマで迫害された初期キリスト教徒の地下墓所であるカタコンベから聞こえてくる祈りの歌が、レスピーギの得意とするグレゴリオ聖歌に由来する旋律で表現される。第3曲〈ジャンニコロの松〉は、ピアノのアルペッジョ(分散和音)に続くクラリネットの旋律で幕を開ける。ローマの街を一望できるジャンニコロの丘に立つ松が、月明かりに浮かび上がる。幻想的な響きの中から、最後に聞こえてくる(録音された)ナイチンゲールのさえずりが、現実と幻想の境界線を曖昧にする。第4曲〈アッピア街道の松〉は夜明けのアッピア街道に立つ松である。超弱音から始まり、イングリッシュ・ホルンの異国的旋律によっていつしか古代ローマの世界に入り込む。街道を行進する古代ローマ軍が次第に近づき、オルガンや、バンダとして指定された金管楽器のフリコルノ(本日はトランペット、トロンボーンで代用)の堂々とした響きとともに、美しき威厳として高らかに描かれる。

作曲年代	1923～1924年
初演	1924年12月14日、ベルナルディーノ・モリナーリの指揮、ローマ、アウグステオ・コンサート・ホール
楽器編成	フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、グロッケンシュピール、タムタム、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、大太鼓、ラチェット、ハーブ1、ピアノ1、チェレスタ1、オルガン1、弦楽、バンダ:ソプラノ・フリコルノ2(トランペットで代用)、テノール・フリコルノ2(トランペットで代用)、バス・フリコルノ2(トロンボーンで代用)、ナイチンゲールの鳴き声の録音



## 第二十二回

### オーケストラへの女性の参画

シリーズ

# オーケストラの ゆくえ

現代のオーケストラをめぐる

さまざまなトピックを深掘りしていくシリーズ。

第二十二回は、ジェンダーの視点から

音楽史を研究している玉川裕子さんに

オーケストラへの女性の参画について語っていただきます。

玉川裕子

Yuko Tamagawa

#### ウィーン・フィル狂騒曲

1997年1月4日、この年最初の朝日新聞夕刊トップを飾ったのは「ウィーン・フィル狂騒曲——男だけの伝統150年『女性に開放』圧力強まる」であった。同記事によると、この当時世界の一流オーケストラで「男だけ」を貫くのはウィーン・フィルのみであり、たまりかねた女性音楽家たちが前年末にウィーン市内で「ウィーン・フィル女性団員は誕生するか」という公開討論会を行ったという。女性受け入れ反対派が唱えるのはこうだ。女性は子どもを産む。2人出産すれば4年休むことになり、その間オーケストラは交代要員を頼まなければならない。女性自身も最高水準の技術を維持するのは難しい

だろう。公開討論会ではこの産休問題が集中砲火を浴びた。「たとえ4年休んだとしても、音楽家の生命は40年。あとの36年はその楽器でナンバーワンの演奏家(女性)を使えるのに、二番手の男性演奏家で40年も我慢するというのはおかしい」。「子どもを産まない女性」も「育児休業をとる男」もいるという発言もあったという。

ウィーン・フィルが女性団員を受け入れないことは、すでに1990年代初めより折に触れ批判的となっていた。件の公開討論会から間もない1997年2月、長年ハーブ奏者としてウィーン・フィルで演奏していたアンナ・レルクス<sup>くどん</sup>が、ついに女性初の正式団員に認められた。しかし、その後2人目の女性が正式に入団したのは2004年のことで、レルクスの後任だった。

2007年に女性ヴィオラ奏者が3人目の正式団員に迎えられると、ようやくヴァイオリンを中心に女性の採用が続く。2011年にはアルペナ・ダナイローヴァが初の女性コンサートマスターに就任したが、現在でも女性団員は全体の1割に届くか届かないかに留まっている。

### オーケストラから 締め出された女性たち

古今東西、女性たちは音楽に携わってきた。それなのに、なぜオーケストラの女性団員不在が「伝統」なのだろう。

本シリーズ第20回で、小宮正安氏がウィーン・フィルの起源に言及されている。同楽団は宮廷歌劇場オーケストラのメンバーによって演奏会用オーケストラとして設立された。貴族に代わる社会の新しい担い手として興隆してきた市民階級が、器楽による演奏会を求めたのである。楽団員はプロの音楽家であり、公開の場で演奏することが彼らの生活を財政的に支えていた。楽団が設立された19世紀は、まさにこの事実が女性をオーケストラから締め出すことになった。というのも、産業革命によって拡張しつつあった都市に住む市民階級は、自分たちにふさわしい家族形態——夫婦と子ども——を形成するなかで、女性の活動の場を家庭領域と定めたのである。市民階級の女性たちは音楽の嗜み<sup>たしな</sup>を求められた。だがそれは家庭の団欒<sup>だんらん</sup>を心地よく彩るものとしてであって、家庭外で活躍し、それによって金銭を得ることは良家の子女にはふさわしくないとされた。かくして、ウィーン・フィルに限らず、職業集団であるオーケストラの門戸は女性たちに閉ざされることになった。

### 女性オーケストラの誕生

1868年、ウィーンで女性だけのオーケストラが設立された。「ヨーロッパ初の女性オーケストラ」と称されたこの楽団の設立者は、ヨゼフィーネ・ヴァインリヒという女性で、彼女は自ら指揮台にのぼり、設立1年後にはオーストリアおよび近隣諸国を巡演、その後数年の間にイギリスや北欧、さらにはアメリカまで足を伸ばした。同時代の批評はおおむね好評だった。ただし、男性批評家たちの関心は音楽的な出来栄以上に、女性奏者のみのオーケストラが与える視覚的な光景に向かっていた。

おおむね20～40人程度の女性から成るこの楽団は、設立から5年を経た1873年、男性を受け入れる。彼らは全員金管楽器奏者だった。それまで管楽器奏者は3人のフルート奏者しかいなかった。管楽器を欠いたオーケストラの響きはしばしば批判されたという。そこで、男性金管楽器奏者を迎え入れることになったらしい。だが、なぜ女性の管楽器奏者を採用しなかったのだろう。管楽器を演奏する女性がそもそもないかったのである。

### 女性の楽器、男性の楽器

現代日本では吹奏楽が盛んである。男子のみならず、多くの少女たちが木管や金管楽器を吹いている。だが、19世紀のドイツ語圏ではこうしたことは考えられなかった。女性が奏でることを許された楽器は、ピアノやハープ等ごくわずか。管楽器や弦楽器は、女性が手を出そうものなら「はしたない」とたちまち非難を浴びることになった。理由の大半は、女性が楽器を



ヨーロッパ初の女性オーケストラ  
(ヴィンチェンツ・カツラーによる木  
版画、1873)

構えたときの視覚的イメージからきている。たとえば、弦楽器は古来より女性の身体に比せられてきた。そのため女性が弦楽器を構えると同性的愛を連想させるという。チェロにいたっては楽器を足で挟むうに、<sup>きお</sup>棹の部分<sup>さし</sup>を胸で支えるので、性的連想を引き起こすものとみなされた。1840年代にフランス出身の女性チェリストがドイツ語圏で演奏会を行った時、彼女は男性たちの好奇の目に<sup>さら</sup>晒されることになった。また、優美で華奢であるべきという女性のイメージが、狩猟や軍隊で使われた管楽器を女性が吹くことの妨げになった。そもそも管楽器吹奏に必要な<sup>きょうじん</sup>強靱さを女性は欠くとか、息を吹き込む時の<sup>ゆが</sup>歪んだ顔が美しさを損なうとも考えられた。

それでも、19世紀を通じて弦楽器を手にする女性は少しずつ増えていった。件の「ヨーロッパ初の女性オーケストラ」には、ヴァイオリンおよびヴィオラ奏者の他に、チェロやコントラバスを演奏する女性が在籍した。また、女性打楽器奏者の存在も確認されている。

ちなみに、女性に門戸を閉ざしていたはずのオーケストラが、古くから例外的に女性を受

け入れていたのがハープ奏者であった。この楽器はむしろ男性が奏することのほうが不自然と受けとめられ、19世紀においても著名なハープ奏者の数は女性が男性を上回り、定職についていたプロの女性も存在した。ウィーン・フィルが受け入れた女性団員の最初の2人がハープ奏者であったのは偶然ではないだろう。

## 日本の場合

さて、日本はどうだろう。N響が創立60周年を機にまとめた1926年から1987年までの在籍楽員一覧によると、1931年に当時の新交響楽団に4人の女性ヴァイオリニストが入団している。その後、NHK交響楽団と改称する1951年までに、計16名の女性団員が確認できる。欧米でプロのオーケストラが女性を本格的に受け入れ始めたのは第2次世界大戦後のことなので、日本では欧米に先駆けて女性団員が存在したことになる。

新響が早い時期から女性ヴァイオリニストを受け入れていた背景として、近代日本で西洋



東京音楽学校管弦楽団と合唱団（東京藝術大学音楽学部大学史料室所蔵）

音楽が定着するにあたって、女性が大きな役割を果たしたことが考えられるだろう。日本でも、もちろん良家の女性は家庭に留まることを求められたが、とくに音楽の分野では教職も含め、早くから音楽を職業とする女性が存在した。安藤幸（旧姓は幸田、幸田露伴の妹）をはじめとして、ヴァイオリンを演奏する女性も珍しくなく、東京音楽学校では女性もオーケストラに参加していた。だが管楽器は事情が異なる。近代日本で管楽器文化を育んだのは軍楽隊であった。そこに女性が入る余地はなかった。

現在、プロ、アマを問わず、管楽器を女性が吹奏することに対する抵抗感ほぼ消滅しているだろう。N響をはじめとする日本のオーケストラでは、弦楽器のみならず、管楽器パートでも相当数の女性が活躍している。金管楽器はともかく、団員の男女比の是正は日本のオーケストラの中心的課題ではないように思われる。

それでは、日本のオーケストラにおいては、ジェンダーというフィルターから自由な、実力のみが問われる場がすでに実現しているのだろ

うか。筆者からみていまだ「男性の聖域」と思われる領域がある。指揮者と、コンサートで取りあげられる作品の作曲者である。現在はごく稀にしか女性が登場しないこの領域で、今後女性の活躍が増えることを期待したい。

#### 参考文献

- Annkatrin Babbe, “Ein Orchester, wie es bisher in Europa noch nicht gesehen und gehört worden war”: Das “Erste Europäische Damenorchester” von Josephine Amann-Weinlich (1811–1875), Bis-Verlag der Carl von Ossietzky Universität Oldenburg, 2011.
- フライア・ホフマン『楽器と身体——市民社会における女性の音楽活動』（阪井葉子・玉川裕子訳、春秋社、2004）

#### 文 | 玉川裕子（たまがわ ゆうこ）

桐朋学園大学准教授。おもな研究領域は、近代ドイツおよび日本の音楽文化史、ジェンダー視点による音楽史。著書に『クラシック音楽と女性たち』、訳書に『クララ・シューマン』、共訳書に『楽器と身体——市民社会における女性の音楽活動』など。

# Overview

## 2月定期公演

### 後期ロマン派と20世紀ロシア音楽で パーヴォ&N響コンビの真骨頂を堪能

2月は首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィが3つのプログラムを指揮する。

Aプロはリヒャルト・シュトラウス《ヴァイオリン協奏曲》とハンス・ロット《交響曲第1番》という珍しい曲がとりあげられる。ともに作曲家の若き日に書かれた、1880年代の作品。《ヴァイオリン協奏曲》ではアリョーナ・バーエワが独奏を務

め、17歳のリヒャルト・シュトラウスのみずみずしい感性を伝える。ハンス・ロットはマーラーに強い影響を与えた作曲家。25歳で早世したが、その先駆性は際立っている。

Bプロはオール・ストラヴィンスキー・プログラム。《葬送の歌》は、近年失われた楽譜が発見され、2016年に復活演奏されたばかりの初期作品である。代表作《春の祭典》では、パーヴォ&N響コンビの切れ味鋭いサウンドと緻密なアンサンブルが聴きどころ。

Cプロはロシア音楽プログラム。情熱的な演奏でセンセーションを巻き起こすピアニスト、カティア・ブニアティシヴィリがラフマニノフ《ピアノ協奏曲第2番》を演奏する。プロコフィエフ《交響曲第6番》は晩年期の作品。ロシア民謡風の主題、荒々しいモダニズム、擬古的な曲想など、多様な要素が一作に混在し、発表当時から議論を呼んできた問題作を、どのように聴かせてくれるのだろうか。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

## A

2/9(土) 6:00pm

2/10(日) 3:00pm

NHKホール

R.シュトラウス／ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品8

ハンス・ロット／交響曲 第1番 ホ長調

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ

ヴァイオリン：アリョーナ・バーエワ

## B

2/20(水) 7:00pm

2/21(木) 7:00pm

サントリーホール

ストラヴィンスキー／幻想曲「花火」作品4

ストラヴィンスキー／幻想的スケルツォ 作品3

ストラヴィンスキー／ロシア風スケルツォ

ストラヴィンスキー／葬送の歌 作品5

ストラヴィンスキー／バレエ音楽「春の祭典」

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ

## C

2/15(金) 7:00pm

2/16(土) 3:00pm

NHKホール

ラフマニノフ／ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

プロコフィエフ／交響曲 第6番 変ホ短調 作品111

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ

ピアノ：カティア・ブニアティシヴィリ



## PROGRAM

A

## Concert No.1905 NHK Hall

January

26(Sat) 6:00pm

27(Sun) 3:00pm

conductor | Tugan Sokhiev

harp | Xavier de Maistre

viola | Ryo Sasaki\*

concertmaster | Fuminori Maro Shinozaki

## Anatoly Liadov

**"Baba-Yaga", tableau musical  
d'après un conte populaire russe  
op.56 [3']**

## Reinhold Glière

**Harp Concerto E-flat major op.74  
[27']**

I Allegro moderato

II Tema con variazioni: Andante

III Allegro giocoso

— intermission —

## Hector Berlioz

**"Harold en Italie", symphony with  
solo viola op.16\* [43']**

I Harold aux montagnes. Scènes de  
mélancolie, de bonheur et de joieII Marche de pèlerins, chantant la prière du  
soirIII Sérénade d'un montagnard des Abruzzes à  
sa maîtresseIV Orgie de brigands. Souvenirs des scènes  
précédentes

## Artist Profiles

## Tugan Sokhiev, conductor



© M. Hironaka

Tugan Sokhiev was born in Vladikavkaz, the capital of North Ossetia, in 1977. He was one of the last students of Ilya Musin, a prominent teacher, at the St. Petersburg Conservatory, and after Musin's death, he studied conducting under Yuri Temirkanov. He became Principal Guest Conductor of the Orchestre national de Capitole de Toulouse in 2005, and three years later he became Music Director,

a position he holds to this day. He was also Music Director of the Deutsches Symphonie-Orchester Berlin (DSO Berlin) from 2012 to 2016, and he has been Music Director and Chief

A

26 &amp; 27 JAN. 2019

Conductor of the Bolshoi Theatre since 2014. He has been continually guest-conducting to great acclaim world renowned orchestras such as the Berliner Philharmoniker, the Wiener Philharmoniker, the Royal Concertgebouw Orchestra, the Chicago Symphony Orchestra, the Boston Symphony Orchestra and the Philadelphia Orchestra, while at the same time working on his operatic repertoire at the Metropolitan Opera House and the Mariinsky Theatre as well as at the Festival International d'Art Lyrique d'Aix-en-Provence. After his first collaboration with the NHK Symphony Orchestra in October 2008, he returned to the podium in November 2013, in January and October 2016, and in November 2017.

## Xavier de Maistre, harp



Xavier de Maistre was born in Toulon, France in 1973, and, at the age of nine, started to learn the harp at a conservatoire in his hometown. He further studied under Jacqueline Borot and Catherine Michel in Paris. At the age of sixteen, he won the Paris Harp Competition and he joined the Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks in 1996. In 1998, he won the USA International Harp

Competition in Bloomington, Indiana, and in the following year, he was appointed solo harpist with the Wiener Philharmoniker. In 2002, he performed Ginastera's Harp Concerto with the Wiener Philharmoniker under André Previn. As a soloist, he has worked with orchestras such as the Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks and the Mozarteum Orchester Salzburg, and with sopranos including Diana Damrau and Mojca Erdmann in duo concerts. He has recorded Rodrigo's *Concierto de Aranjuez*, Haydn's Piano Concertos and Mozart's Piano Concereto No.19, which were all arranged for harp. Since 2001, he has taught at the Hochschule für Musik und Theater Hamburg. He performed Boieldieu's Harp Concerto with the NHK Symphony Orchestra in its summer concert in July 2005, and Mozart Piano Concerto No.19 [harp version] at the Orchard Hall Subscription Concert in April 2014.

## Ryo Sasaki, viola



Born in Saitama, Japan, Ryo Sasaki graduated from the Music High School Attached to the Faculty of Music, Tokyo University of the Arts, and Tokyo University of the Arts. In 1991, he won first prize at the Chamber Music Competition of the Japan Society for Contemporary Music and the Asahi Contemporary Music Award, and in the following year, he won second prize at the Tokyo International Music Competition,

chamber music section. He further studied at the Juilliard School, and he converted from violin to viola. He participated in the Aspen Music Festival and the Marlboro Music School and Festival. He further studied under Yozo Kakeya, Kazuki Sawa, Chikashi Tanaka, Dorothy DeLay and Masao Kawasaki, and chamber music from Toshiyuki Uzuka, Felix Galimir and Jacob Lateiner. Mr. Sasaki earnestly performed chamber music as a member of the Okayama

String Quartet and the Tokyo Kreis Ensemble. He has taught at Toho Gakuen School of Music and Senzoku Gakuen College of Music. He joined the NHK Symphony Orchestra in 2004, and became Principal Violist from 2008. He played the viola solo of Sancho Panza in *Don Quixote* by Richard Strauss under Paavo Järvi in the orchestra's October 2015 subscription concert. The solo part of the symphony *Harold in Italy* by Berlioz is a concerto-like large-scale performance, and will allow him to display fully his prowess as a soloist.

[Tugan Sokhiev by Kotaro Yamazaki, music critic, Xavier de Maistre, Ryo Sasaki by Haruo Yamada, music critic]

---

## Program Notes | Akira Ishii

---

### Anatoly Liadov (1855–1914)

---

## “Baba-Yaga”, tableau musical d’après un conte populaire russe op.56

Anatoly Liadov received initial music lessons from his father, Konstantin Liadov, who was the principal conductor at the Mariinsky Theatre in St. Petersburg. In 1870 Liadov became a student at the St. Petersburg Conservatory studying piano and violin. In the 1870s Liadov acquainted with the group of Russian composers known as *The Five*. This led him to participate in Nikolai Rimsky-Korsakov's composition class at the conservatory, where Liadov himself began to teach in 1878.

Liadov completed his tone poem *Baba-Yaga*, Op. 56 in 1904. Its first performance took place in St. Petersburg on March 18 of the same year. The composition requires a large orchestra, calling for piccolo, two flutes, two oboes, English horn, two clarinets, bass clarinet, two bassoons, contrabassoon, four French horns, two trumpets, three trombones, tuba, timpani and a variety of percussion instruments, and strings. The size of the orchestra, however, does not match that of the composition. The piece is not a lengthy work. It only takes approximately three and a half minutes to perform. The tone poem is about Baba-Yaga, a witch in eastern European folklore. Baba-Yaga lives deep in the forest and may help or hinder people she sees. Before Liadov, Modest Mussorgsky had dealt with the same topic, writing “The Hut on Hen's Legs,” a movement in his *Pictures at an Exhibition*.

---

### Reinhold Glière (1875–1956)

---

## Harp Concerto E-flat major op.74

The harp is one of the oldest musical instruments, but composers of serious music did not write much for it until the beginning of the nineteenth century. In the Baroque period, the harp was sometimes called for to accompany voices in certain scenes in operas, especially those places where a celestial mood is required. The instrument was also one of the optional instruments in the *basso continuo* part, a group of instruments discretionally playing notes and harmony to support solo voices and instruments. Solo music for the harp, on the other hand, was scarcely composed. Händel's Concerto for Harp in B-flat major, HWV 294 is a wonderful exception. The situation did not change much in the second half of the eighteenth century; however, there were a higher number of musicians who composed music for the harp. After

A

26 & 27 JAN. 2019

the pedal harp was fully developed in the early nineteenth century, composers began to write a significant amount of music for the instrument.

Harp Concerto in E-flat major, Op. 74 was composed by Reinhold Glière in 1938. To complete the composition, the composer needed much help from Ksenia Erdely (1878–1971), a Russian harp player who was the soloist at the first performance of the concerto on November 23, 1938. The work, consisting of three movements, is written in a rather conservative manner and is full of Romantic ideas and sounds.

## Hector Berlioz (1803–1869)

### “Harold en Italie”, symphony with solo viola op.16

Berlioz’s *Harold en Italie* (*Harold in Italy*) is an orchestral composition that exhibits a curious mixture of symphony and solo concerto. From a structural perspective, the piece is by no means a concerto. It consists of four movements; this is a highly unusual element in solo concertos of the early nineteenth century. Neither does it utilize the musical form commonly found in concertos. Moreover, each of the movements is described explicitly by the composer himself about what he wished to depict. Here Berlioz’s intention is clear — he wanted to write a symphony in a style that would later be classified as a tone poem. The work, on the other hand, does show some concerto-like quality. Berlioz writes extensive solo passages for viola in every movement of the work. Furthermore, the composer instructs in the score of the work the position of the solo viola player in the orchestra as if Berlioz regards the violist as a soloist of a concerto. He writes, “The player [solo viola] must stand in the fore-ground, near to the public and isolated from the orchestra.”

In his *Mémoires* Berlioz mentions how he came to compose *Harold en Italie*. According to him, Niccolò Paganini asked the composer to write a solo viola piece with orchestral accompaniment so that he could play in a concert a Stradivarius viola he had just acquired. Apparently, Paganini did not own music suitable for his new instrument. When the violinist saw the sketch of the first movement, he was disappointed because there were many silent moments in the solo viola part. He wanted the viola to continuously play passages in a manner similar to that in the solo part of his violin concertos. Berlioz, on the other hand, had an entirely different vision. He says, “My idea was to write a series of scenes for the orchestra in which the solo viola would be involved as a more or less active character, always retaining its own individuality.” It is clear here that Berlioz never had an intention of composing a typical concerto.

Berlioz wrote *Harold en Italie* in 1834. The first performance of it took place in Paris on November 23, 1834 (Paganini did not play the solo viola). The composition was inspired by Lord Byron’s *Childe Harold*, combined with Berlioz’s personal experience in Italy. Each of the four movements carries a descriptive title: The first movement, “Harold in the mountains. Scenes of melancholy, happiness and joy;” the second, “Procession of pilgrims singing the evening hymn;” the third, “Serenade of an Abruzzi-mountaineer to his sweetheart,” and the fourth, “The brigand’s orgies. Reminiscences of the preceding scenes.” From these words alone it is easy to picturize “Harold,” represented by the solo viola, wandering around in Italy and encountering a variety of situations there.

## Akira Ishii

Professor at Keio University. Visiting scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

B

## Concert No.1904 Suntory Hall

January

16(Wed) 7:00pm

17(Thu) 7:00pm

conductor | Tugan Sokhiev | for a profile of Tugan Sokhiev, see p.43

concertmaster | Fuminori Maro Shinozaki

## Gabriel Fauré

## “Pelléas et Mélisande”, suite op.80

[19']

- I Prélude
- II Fileuse
- III Sicilienne
- IV Mort de Mélisande

## Benjamin Britten

## Simple Symphony op.4 [18']

- I Boisterous Bourrée
- II Playful Pizzicato
- III Sentimental Saraband
- IV Frolicsome Finale

— intermission —

## Nikolai Rimsky-Korsakov

## “Schéhérazade”, symphonic suite

op.35 [46']

- I La mer et le vaisseau de Sinbad
- II Le récit du prince Kalendar
- III Le jeune prince et la jeune princesse
- IV Fête à Bagdad—La mer—Le vaisseau se brise contre un rocher présentant l'aspect d'un guerrier d'airain—Conclusion

## Program Notes | Akira Ishii

## Gabriel Fauré (1845–1924)

## “Pelléas et Mélisande”, suite op.80

In 1898 Gabriel Fauré was commissioned to compose incidental music for *Pelléas et Mélisande*, a play by Maurice Maeterlinck. After the run of the production of the play with Fauré's music the composer decided to make a concert version of the incidental music. He adopted three pieces from it to form a suite for orchestra. During the process Fauré realized that he needed to rework these pieces partly because a large portion of them had been orchestrated not by him, but by one of his pupils. Besides reorchestrating the pieces, the composer also altered several sections of the suite to make it more effective as a concert piece. The suite premiered in February 1901. Fauré was apparently not happy with the first performance of it and decided to add another movement (*Sicilienne*, the current third movement).

B

16 &amp; 17 JAN 2019



## Simple Symphony op.4

Benjamin Britten's, *Simple Symphony*, Op. 4 was written from late 1933 to early 1934 when Britten was only twenty years old. To compose it he reused melodies in the pieces he wrote in his childhood. *Simple Symphony* is scored for strings only, lacking any wind or percussion parts (the piece can also be performed by string quartet). The work premiered on March 6, 1934, conducted by the composer himself. *Simple Symphony* comprises four relatively short movements. The first is titled "Boisterous Bourrée" (Bourrée is a type of duple-meter dance that was popular in the Baroque period). Here Britten uses themes from his Piano Suite No. 1 of 1926. After a series of chords, the movement opens with a quasi-fugue, which helps create a feeling of the boisterousness mentioned in its title, followed by a section that displays a peaceful tune. The second movement, "Playful Pizzicato," takes thematic materials from Britten's Scherzo for Piano (1924) and Piano Sonata in B-flat major, Op. 5. The movement consists only of pizzicato notes, as suggested in the title. The third movement, "Sentimental Saraband" (Saraband is yet another type of Baroque dance), utilizes melodies from Piano Suite No. 3 (1925) and Waltz for Piano (1923). The finale, "Frolicsome Finale," includes themes from Britten's Piano Sonata No. 9 (1926).

## Nikolai Rimsky-Korsakov (1844–1908)

### "Schéhérazade", symphonic suite op.35

Nikolai Rimsky-Korsakov was one of the most influential composers in Russia in the second half of the nineteenth century. He was a member of *The Five*, a group of Russian composers in St. Petersburg who led the nationalistic movement in music (the others were Mily Balakirev, César Cui, Modest Mussorgsky, and Alexander Borodin). They all wrote music incorporating Russian folk songs or elements of them, which generated distinctively different sonority from that of Western harmony and melodies. Rimsky-Korsakov played an important role in the history of Russian music. He succeeded the style of composition established by Mikhail Glinka (1804–1857). Rimsky-Korsakov's knowledge and experience was then passed down to younger musicians, for he became Professor of Practical Composition at the St. Petersburg Conservatory in 1871.

Rimsky-Korsakov wrote a high number of large-scale compositions, including more than fifteen operas. Among numerous works for orchestra by the composer there are three symphonies. The best known orchestral composition, however, is not any of them; it is his symphonic suite, *Schéhérazade*, Op. 35.

Rimsky-Korsakov composed *Schéhérazade* in 1888. The work premiered on the third of November of the same year, conducted by the composer himself. The suite is loosely based on *One Thousand and One Nights*, a collection of Middle Eastern folk tales. Rimsky-Korsakov did not want to incisively depict characters and episodes from *One Thousand and One Nights* and did not provide the four movements in the suite with any descriptive titles. He, however, changed his mind later and wrote the following words: for the first movement, "The Sea and Sinbad's Ship; for the second, "The Kalandar Prince;" for the third, "The Young Prince and The Young Princess;" and for the fourth, "Festival at Baghdad. The Sea. The Ship Breaks against a Cliff Surmounted by a Bronze Horseman."

**Akira Ishii** | For a profile of Akira Ishii, see p.46

## PROGRAM

C

## Concert No.1903 NHK Hall

January

11(Fri) 7:00pm

12(Sat) 3:00pm

conductor | Stéphane Denève

cello | Gautier Capuçon

concertmaster | Ryotaro Ito

## Albert Roussel

“Bacchus et Ariane”, ballet suite  
No.2 [18’]

## Camille Saint-Saëns

Cello Concerto No.1 a minor op.33  
[20’]

I Allegro non troppo

II Allegretto con moto

III Tempo primo (Allegro non troppo)

— intermission —

## Hector Berlioz

“Le carnaval romain”, overture op.9  
[9’]

## Ottorino Respighi

“Pini di Roma”, symphonic poem  
[21’]

I I pini Villa Borghese

II Pini presso una catacomba

III I pini del Gianicolo

IV I pini della Via Appia

## Artist Profiles

## Stéphane Denève, conductor



© SWR

Stéphane Denève was born in Tourcoing, in northern France, in 1971. After graduating from the Paris Conservatoire in 1995, he polished his conducting technique by working as a conducting assistant to Georg Solti, Georges Prêtre and Seiji Ozawa. He served as Music Director of the Royal Scottish National Orchestra and Chief Conductor of the Radio-Sinfonieorchester Stuttgart (des SWR). He is currently Principal Guest Conductor of the Philadelphia Orchestra, as well as Music Director of the Brussels Philharmonic, a position he assumed in 2015, and which has been extended through the 2022 season. He has been designated as Music Director of the St. Louis Symphony Orchestra from the 2019/20 season. He has been closely associated

C

11 &amp; 12, JAN. 2019

with the Japanese music world, having participated in the Saito Kinen Festival, Matsumoto in 1998 as an assistant to Seiji Ozawa. His first appearance in Japan as a conductor was in 2003 when he conducted the New Japan Philharmonic. He first worked with the NHK Symphony Orchestra in 2015, conducting a French repertoire, his forte, including Ravel, Lalo and Roussel. He has recorded albums of works by Debussy, Roussel, Ravel and Franck, and he received the Diapason d'Or of the year in 2016 for his album of works of present-day French composer Guillaume Connesson.

---

## Gautier Capuçon, cello



Gautier Capuçon was born in France in 1981, and started learning the cello at the age of five, studying at the Paris Conservatoire and participating in the European Union Youth Orchestra and the Gustav Mahler Jugendorchester. In 1999, he won the International André Navarra Competition in Toulouse. He has since been actively performing as a soloist worldwide and

working with many of the world's leading orchestras and conductors such as the Berliner Philharmoniker under Gustavo Dudamel and the Orchestre de Paris under Christoph Eschenbach, to name a few. He also energetically devotes himself to playing chamber music with Martha Argerich, Daniel Barenboim and his brother and violinist Renaud Capuçon.

With his wide discography, mainly from the Romantic period to the 20th Century, he fascinates many classical music fans with his outstanding technique and flowing performances. To promote music education, he jointly established the *Classe d'Excellence de Violoncelle* in Paris with the Louis Vuitton Foundation. This is his second collaboration with the NHK Symphony Orchestra, the first one being in 2013. He plays a 1701 Matteo Goffriller cello.

[Stéphane Denève by Seiko Ito, music critic, Gautier Capuçon by Yoichi Iio, music journalist]

---

### Program Notes | Akira Ishii

---

#### Albert Roussel (1869–1937)

---

### “Bacchus et Ariane”, ballet suite No.2

Albert Roussel was one of the most outstanding composers in France during the first several decades of the twentieth century. Roussel began his studies in music relatively late in his life. He did not enter the *Schola Cantorum* in Paris, where he was a pupil of Vincent d'Indy, until the year 1898. There Roussel continued his studies until 1907. At the same time, however, he started to teach counterpoint at the school from 1902. After WWI Roussel moved to Normandy and died in 1937 in Royan, a city in southwestern of France.

Roussel's *Bacchus et Ariane* (*Bacchus and Ariadne*), Op. 43 is a two-act ballet written in 1930. The work premiered on May 22, 1931 by the *Opéra de Paris*. Roussel then made two suites using music from the ballet. The first performance of Suite No. 1 took place on April 2, 1933 under the direction of Charles Munch and that of the second, on February 2, 1934, conducted by Pierre Monteux. Suite No. 1 contains five pieces taken from the first act of the ballet. The second suite comprises seven movements, utilizing music from the second act of the theatrical work. The story of *Bacchus et Ariane* appears in Greek mythology. Deserted by her lover Theseus, Ariane has been left on the island of Naxos. She then is discovered on the shore by the god Bacchus. This classic tale, especially the part where Ariane is abandoned, has been dealt with as the theme of numerous operas and paintings in the seventeenth and eighteenth centuries.

## Camille Saint-Saëns (1835–1921)

### Cello Concerto No.1 a minor op.33

Camille Saint-Saëns was one of the most important French composers of the Romantic era. Many of Saint-Saëns' compositions remain popular today and frequently performed. Orchestras often include in their programs Symphony No. 3 in C minor, Op. 78 "Organ Symphony" (1886), an orchestral work with an organ part. *Le carnaval des animaux* (*The Carnival of the Animals*) (1886) is a favorite especially among children. For a violinist, Introduction and Rondo Capriccioso in A minor, Op. 28 (1863) is one of the most essential pieces for solo violin and orchestra. Saint-Saëns' Piano Concerto No. 2 in G minor, Op. 22 (1868) is increasingly gaining status as an indispensable piece for the instrument. Likewise, Cello Concerto No. 1 in A minor, Op. 33 is regarded by many as a piece cellist must learn. Perhaps the work is not as admired as the other famous nineteenth century cello concertos like Cello Concerto No. 2 in B minor, Op. 104 by Antonín Dvořák and Cello Concerto in A minor, Op. 129 by Robert Schumann. Nevertheless, Saint-Saëns' composition is full of melodies and phrases that provoke inner emotion of performers and listeners alike.

Saint-Saëns composed Cello Concerto No. 1 in 1872 for a French cellist Auguste Tolbecque. The work premiered in Paris on January 19, 1873. The concerto comprises three movements, but they are all continuously performed.

## Hector Berlioz (1803–1869)

### "Le carnaval romain", overture op.9

Hector Berlioz did not begin to study music seriously until relatively late in his life. He entered the Paris Conservatory in 1826, two years after discontinuing his studies in medicine. Berlioz, however, had displayed a unique ability in composition since the early stage of his career. His understanding of instruments in particular was extraordinary and gave him tremendous advantage in creating music that sounds entirely different from that of any other composer. The most significant as well as influential composition by Berlioz is undoubtedly *Symphonie fantastique*, Op. 14 composed in 1830. In this piece Berlioz employed a variety of instruments that had been hardly utilized by the composers before him.

*Le carnaval romain overture* (*The Roman Carnival Overture*), Op. 9 was composed in 1844. Its first performance took place in Paris on February 3, 1844 under the direction of the composer himself. The composition is a concert overture, not intended to be attached to any specific

theatrical piece like operas and ballets. Some musical materials in it, however, were taken from Berlioz's unsuccessful opera *Benvenuto Cellini*, Op. 23, first performed in 1838. The opera is about the well-known Italian Renaissance sculptor Benvenuto Cellini at the Carnival in Rome in 1532. The strong association between the opera and the concert overture is indeed the basis for the title of the latter. The overture calls for a less variety of instruments in comparison with *Symphonie fantastique*, yet Berlioz was still successful in producing rich tone colors no other composers of the time could have imagined.

## Ottorino Respighi (1879–1936)

### “Pini di Roma”, symphonic poem

Ottorino Respighi was an Italian composer born in Bologna. Respighi's father was a piano teacher and provided his child with initial music lessons. Respighi eventually attended the Bologna Conservatory, from which he obtained a diploma in violin in 1899. A year later he went to St. Petersburg to become the principal violist at the Russian Imperial Theater. While he was there, he met Nicolai Rimsky-Korsakov and studied with him orchestration. This led Respighi to return to his hometown to study composition. He acquired his second diploma from the conservatory in Bologna, this time in composition. In 1913 Respighi became Professor of Composition at the *Conservatorio di Santa Cecilia* in Rome. He held the position until his death in 1936.

Respighi's *Pini di Roma* (*Pines of Rome*) was composed in 1924 and is the second of his “Roman Trilogy” (a series of three tone poems about various Roman topics; the other two are *Fontane di Roma* (*Fountains of Rome*) written in 1916 and *Feste romane* (*Roman Festivals*), in 1928). The tone poem premiered in Rome on December 14, 1924. It is a symphonic work depicting pine trees at four different locations in Rome. The composition comprises four movements, performed without interruption. The first movement, titled “Pines of the Villa Borghese,” illustrates playful children around the pine trees at the Villa Borghese. The second movement, “The Pines near a Catacomb,” creates an atmosphere one might experience when he visits the ancient cemetery/graveyard. Here the melodic themes mimic religious hymns, producing austere sonority. Respighi carries the solemn mood of the second movement into the third, which is titled “Pines of the Janiculum” (Janiculum is a hill in western Rome). The movement portrays the pines at the Janiculum hill at night. Towards the end a recorded sound of nightingale's warbling appears, announcing the end of the night as well as bringing in a peaceful moment. Incidentally, this is the first instance in the history of music where the usage of a pre-recorded sound is called for in a concert piece. The last movement, “The Pines of the Appian Way,” is about one of the most important ancient Roman roads. It looks back at the glorious days of the Roman Empire with the victorious army marching back into Rome.

*Pini di Roma* is written for a large orchestra. It is scored for three flutes (the third, doubling piccolo), two oboes, English horn, two clarinets, bass clarinet, two bassoons, contrabassoon, four French horns, three trumpets, three trombones, tuba, timpani and a variety of percussion instruments, harp, piano, celesta, organ, and strings. The piece also calls for six buccines, ancient Roman army brass instruments that can be substituted today by trumpets and trombones, and the above-mentioned pre-recorded sound of nightingale's song.

---

**Akira Ishii** | For a profile of Akira Ishii, see p.46



公演報告

# 2018年 11 定期公演

SUBSCRIPTION CONCERTS  
IN NOVEMBER, 2018

月

11月定期公演は、2人の指揮者が登場。

Aプログラムに登場した広上淳一は

20世紀前半のアメリカ音楽作品を披露。

B・Cプログラムでは、ジャンナンドレア・ノセダが

得意のイタリア、ロシア作品などで熱演を繰り広げました。

**Aプログラム** バーバー／シェリーによる一場面のための音楽 作品7、コーブランド／オルガンと管弦楽のための交響曲、アイヴズ／交響曲 第2番(2018年11月24、25日、NHKホール) **Bプログラム** レスビーギ／リュートのための古風な舞曲とアリア 第1組曲、ハイドン／チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob.VIIb-1、ラフマニノフ／交響的舞曲 作品45(2018年11月14、15日、サントリーホール) **Cプログラム** ラヴェル／ピアノ協奏曲 ト長調、プロコフィエフ／バレエ組曲「ロメオとジュリエット」(抜粋)(2018年11月9、10日、NHKホール)



(左)Aプログラムで指揮を執った広上淳一

(右)コーブランド《オルガンと管弦楽のための交響曲》で独奏を務めた  
鈴木優人(いずれも11月24日)



Bプロのラフマニノフ  
《交響的舞曲》(11月14日)



(左)B・Cプロの指揮を執った  
ジャンンドレア・ノセダ  
(右)Bプロのハイドン  
《チェロ協奏曲第1番》で  
ソリストを務めた  
ナレク・アフナジャリヤン  
(いずれも11月14日)



(左)Cプロのラヴェル《ピアノ協奏曲》でソリストを務めたアリス・紗良・オット  
(右)Cプロのプロコフィエフ《バレエ組曲「ロメオとジュリエット」》(いずれも11月9日)

